

第10回協働実践研究会報告

2016年2月20日(土)、早稲田大学日本語教育研究センター22号館201教室で第10回協働実践研究会が開催されました。今回は53名の参加者がありました。

ポスター発表が3つ、口頭発表が4つ、パネルセッションが1つという内容でした。

◇ポスター発表 10:00~11:00

① 「チームティーチングにおいて教師たちは「共通認識」をどのように持とうとしたか-担当教師3名による実践の振り返りから-」

井上 玲子・杉山 和佳子・伊吹 香織(以上、早稲田大学)

② 「ポスタープレゼンテーションの導入から見えた学習者の「気づき」、「学び」-中国の大学日本語教育における「日本事情」科目の課題発表をもとに-」

菅田 陽平(北京大学大学院生)

③ 「日本語教師が仕事の魅力を明確化する過程-語り合う場の必要性-」

堀 見早(早稲田大学院生)

ポスター発表では、国内外の大学における実践報告や教師対象のインタビュー調査に関する3つの発表がありました。コースデザインを担うコーディネーターと授業担当教師、チームティーチングの教師間、学習者と教師、学習者同士、教師同士、インタビュアーとインタビューーといったさまざまな関係性における「連携」「協働」「対話」などをめぐり、意見交換や議論が行われました。



◇口頭発表

①11:10~11:40

「小学校教育での異職種間の協働実践による『鉛筆の持ち方』から取り組む日本語の学びの危機」の克服」北村 直也(大阪府寝屋川市立点野小学校)

②11:40~12:10

「国内の日本語教育現場における教師多様化の可能性-非母語話者日本語教師の意識調査より-」高橋 雅子(早稲田大学)

~12:10-13:00 昼休憩~

③13:00~13:30

「公立中学校における学校教員と母語支援員との「協働」-問題行動を起こした新渡日生に対する生徒指導を中心に-」 潘 寧(大阪大学大学院生)

④13:30～14:00

「「発達型ワークリサーチ」としての「対話型教師研修」の試みと挫折-フィリピン中等日本語教師研修の事例から-」 松本 剛次(早稲田大学大学院生)

つづいて口頭発表では、小学校の国語教育、中学校の学習生活支援、大学の日本語教育、海外の教師研修といったさまざまなテーマと環境をめぐる教育実践について発表がありました。質疑ではフロアからも多くの質問や意見が投げかけられ、活発な議論が行われました。



◇特別セッション「教師による協働の可能性と展望」

①14:10-14:30 趣旨説明：館岡 洋子(早稲田大学)

②14:30-15:15 協働実践研究会 台湾支部における『教師の協働』

羅 曉勤(銘傳大学)・張 瑜珊(大葉大学)・荒井 智子(銘傳大学)・工藤 節子(東海大学)・許 均瑞(銘傳大学)・陳 明涓(大同大学)・黄 富国(文化大学)

③15:15-16:00 「協働実践」から「創発」へ-協働実践研究会北京支部の活動から見えたもの-

駒澤 千鶴(国際関係学院)・朱 桂榮(北京外国語大学)・菅田 陽平(北京大学大学院生)・鈴木 昭吾(外交学院)・付 陶然・康 楠・李 静宜・瀋洋・陶 思含・王 金芝・夏 家佳(以上、北京外国語大学大学院生)

～16:00-16:15 休憩～

④16:15-17:15 ディスカッション

後半は「教師による協働の可能性と展望」というテーマで特別セッションが行われました。

はじめに、「対話型教師研修」における協働実践の取り組みと関連してセッションの趣旨説明がありました。

その後、協働実践研究会の台湾支部と北京支部のメンバーにより、それぞれの支部の設立経緯および活動内容についての説明がありました。また、研究会での活動を通じた学びが授業実践にどのように活かされたのかという観点から、教室活動の紹介・体験を交えた実践報告が行われました。さらに、今後の課題や展望についても話が及び、台湾支部からは具体的方策としてのティーチング・ポートフォリオやルーブリック、北京支部からは「創造型」の「協



働」と「互助型」の「協働」といったキーワードが挙げられました。

つづいて、館岡洋子氏、羅曉勤氏、張瑜珊氏、荒井智子氏、駒澤千鶴氏、朱桂榮氏、菅田陽平氏の7名のパネリストを中心としたディスカッションの時間が設けられました。まず、北京・台湾それぞれの支部の実践コミュニティ（コアメンバー、ハブメンバー、他の参加者）の様相が図式化され、メンバー間の関係性や、コミュニティの継続性と展開性などについてフロアも交えてやりとりが行われました。その後、「教師の生命体としての実践コミュニティ」をテーマに小グループでのディスカッションが行われ、最後にその内容を全体共有しました。



セッションタイムは、支部の報告をきっかけに参加者が各々属しているコミュニティの性質や活動を振り返る時間になりました。グループディスカッションでは、コミュニティにつきものの失敗・挫折・停滞、ハブメンバーの役割、コアメンバーの連携、理念の普及／布教、所属することの喜びと重圧など、主にコミュニティの意味と持続性に関する意見が出ました。さまざまな顔を持ち変動し続ける「生命体」としてコミュニティを捉えることでその可変性や可能性が感じられる一方、継続していくことの難しさも浮き彫りになったように思います。しかし、「停滞」に見える時期も見方を変えれば「充電」期であり、また次のステップに進んでいくために必要なプロセスである可能性も指摘されました。また、コアメンバーにとっては理念を共有する仲間たちとともにこれまで築いてきたコミュニティの「質を保つ」とことと新参加者を受け入れたり他と連携したりしながら「幅を広げる」とこととの間で葛藤があることも話題にのぼりました。このように、研究会全体を通じて、コミュニティ内部の連携を強めるのみならず他のコミュニティとの連携を図っていくことが一つのテーマになっていたと思います。今回の研究会における出会いや語り合いが、人と人、コミュニティとコミュニティをつなぎ、また新たな「協働」へとつながっていくことを期待します。

研究会終了後、18:00からは早稲田大学近くの「うるとらカフェ」に場所を移して33名の参加者による懇親会が行われました。たくさんの方にお越しいただき、研究会に引き続き熱い議論が交わされる一方で、和やかな雰囲気の中でおしゃべりにも花が咲き、楽しく有意義な時間となりました。会の終わりには海外をはじめ遠方からお越しいただいた方々に一言ずつ感想などをお話しいただきました。ユーモアと含蓄のあるスピーチの連続でしたが、中でも「協働の理念は授業のみでなく今後の自分の人生につながっていく」というお話が印象的でした。

当日お足元の悪い中、研究会・懇親会にご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

文責：古賀 万紀子